

株主のみなさまへ

# 第15期報告書

2012年4月1日～2013年3月31日

株式会社トランスジェニック 証券コード2342

# Highlights 連結決算ハイライト



## ■概況

当社は、平成25年3月期において、前期に引き続き更なる収益基盤の確立を目指した事業規模の拡大およびコスト削減を行いました。その結果、当連結会計年度における当社グループの業績は、売上高704百万円(前期607百万円)で増収、損益についても営業損失36百万円(前期127百万円)、経常損失31百万円(前期120百万円)と大幅に改善し、特別利益の計上により当期純利益は27百万円(前期純損失156百万円)となり上場来初の最終黒字となりました。

セグメント別業績状況は、ジェノミクス事業においては、遺伝子改変マウス作製効率化の改善や新たに開始した遺伝子解析受託によって受注が順調に伸び、売上高は321百万円(前期252百万円)、営業利益は74百万円(前期53百万円)と増収増益となりました。CRO事業においても、受託獲得競争激化が続いたものの、新規顧客開拓により売上高は180百万円(前期147百万円)、営業利益は8百万円(前期は営業損失3百万円)と増収増益となりました。抗体試薬事業においては、抗体製品販売が伸び悩んだものの受託サービス事業が順調に伸び、売上高は202百万円(前期207百万円)、販売管理コスト削減の結果、営業利益は43百万円(前期19百万円)と減収増益となりました。

# Top Message ご挨拶

株主の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素より格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。さて、第15期の事業報告書をお届けするにあたり、ご挨拶申し上げます。

当社は生命資源の開発を通じて社会に貢献する企業を目指しております。この目標を達成するために、当事業年度において、ジェノミクス事業におきましては遺伝子解析事業の開始や有用なモデルマウスの導入を行い、サービス内容の拡充・差別化を図りました。CRO事業におきましては、新実験棟の稼働並びに2013年4月にはM&Aを行い受託能力の大幅拡充を行っております。また、抗体試薬事業におきましては当社が保有する知的財産の事業化を推進すると同時に、当社にとって有益な各研究機関・企業との様々な提携強化を図っております。

当社はこれらの重点施策に全社員一丸となって取り組み、社会的貢献度の高い企業へ成長し続けることで、企業価値のさらなる向上を実現させる所存です。

株主のみなさまにおかれましては、当社の取り組みに何卒ご理解をいただき、なお、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2013年6月 代表取締役社長  
福永 健司



### Profile 略歴

1969年 8月 13日生まれ  
1993年10月 有限責任監査法人トーマツ入所  
2003年 5月 トーマツ・ベンチャーサポート株式会社取締役  
2009年 6月 株式会社トランスジェニック取締役  
2010年 6月 株式会社トランスジェニック代表取締役社長 現任

### Contents 目次

連結決算ハイライト	1	事業のご紹介	5	会社概要	11
ご挨拶	2	研究開発のご紹介	7	株式の状況	11
トップインタビュー	3	知的財産戦略	8	株主メモ	11
		連結財務諸表	10	IRからのお知らせ	11

## Q1 平成25年3月期業績総括についてお聞かせください。

当事業年度の連結売上高は704百万円、前年比16%増の増収となりました。また、単に事業収益の伸びだけでなく、遺伝子破壊マウス作製受託の効率性改善をはじめとして、各事業部門の損益内容が着実に良くなっており、これら各事業部門利益の増加に加え、経営管理コストのスリム化により経常損失を前年比で大幅に圧縮した結果、特別利益の確保により、上場来の最重要経営課題でありました黒字を達成することが出来ました。

なお、当事業年度は営業損益、経常損益、最終損益、全ての黒字化を掲げてスタートしましたので、この点に関しては非常に不本意な結果となりました。これは、年度スタート時の受注残が例年より少なかったこと、2012年7月より本格稼働した新実験棟への顧客誘導に関して想定より時間を要したことによるものです。もっとも、本事業年度の受注活動において黒字化ラインの受注を獲得出来たこと、また、各事業部門の成長性も維持していることも踏まえ、私自身は実質的に黒字転換を達成した事業年度であったと総括しています。

新事業年度においても、このトレンドを継続し経常的な黒字化体質の確立を進めていきます。

## Q2 平成26年3月期には、ファイナンス及び子会社の事業譲受けを実施されています。目的と今後の展開についてお聞かせください。

当社が継続的に黒字化を維持し、安定的な成長軌道に乗るためには、既存事業基盤の一層強化が必要であるとともに、基幹事業とシナジーを持つ関連事業分野の拡大が不可欠と判断しております。

また、当社はこれら事業の強化・拡大戦略として、積極的にM&A、他社との資本・業務提携等の施策を実行する方針です。

既存事業基盤の強化施策の一環としては、新規技術・サービス導入等の施策については継続的に講じております。当該施策の実行に関しては、各事業部門が黒字化していることに加え、当社は十分な自己資金を有しているため、現状、特段の支障はありません。

一方で、当社を取り巻く金融環境及び事業環境を分析した場合、金融環境に関して言えば、山中伸弥教授が率いる研究グループが昨秋ノーベル生理学・医学賞を受賞したこと、安倍政権が同研究成果に多額の研究支援を行うことを決定したこと等を契機としてバイオ分野に俄然注目が集まり、バイオ関連企業の株価は大幅に上昇しました。当社に関しましても2013年3月以降で株価は約2倍程度上昇しております。しかしながら、事業環境に関しては、非上場の同業他社や各研究機関がこれらの恩恵を受けているかと言えば、必ずしもそうではなく、状況は依然険しく厳しい経営を余議なくされており

ます。つまり、M&Aや資本・業務提携のニーズ・案件が非常に強く発生しやすい環境となっております。

当社は、極めて良好と考えられる現金融環境と当社（及び同業他社）を取り巻く極めて厳しい現事業環境とを比較・検討した結果、M&Aや資本・業務提携に関する迅速な意思決定を可能とする現状より更に強固な財務体力を確保しておくことが、当社事業分野の拡大戦略上、極めて重要かつ有効であると判断し、ファイナンス実施の意思決定を行いました。

そして、上記事業拡大の施策の一環として、当社のCRO事業の強化が期待できる医薬品、化学品、医療機器、食品等の前臨床試験及び医薬品、食品等の臨床試験を営む事業体の譲受けを実施いたしました。今回のM&Aにより、当社グループが営むCRO事業のサービス領域・規模は飛躍的に拡大すると同時に、遺伝子破壊マウス作製受託及び有望なモデルマウスの保有・開発、並びに遺伝子解析サービスを営むジェノミクス事業との協働・連携の推進強化が可能となります。

当社は、今後もさらなる事業基盤強化を図ることを目的として、積極的な事業展開に対して効果的な投資の検討および実施を行います。

## Q3 最後に、株主様へのメッセージをお願いいたします。

これまでは、経営の最重要課題として収支構造の強化・改善、すなわち、黒字化を掲げてまいりましたが、この課題につきましては前述のとおり概ね見通しが立ちました。今後、当社は、堅固な財務基盤に加え事業収支を源泉とする再投資能力が確保された研究開発や新規事業分野への投資体力が、より強力な企業体へと成長を遂げてまいる所存です。

当社は、これまで着実に事業規模拡大、損益の改善を実現してきましたが、今後は上記を踏まえ従前と違ったスピード・規模での成長を実現し、また、生命資源の開発を通じて社会に貢献する研究開発型ベンチャーとして企業価値向上に果敢に挑戦し続ける方針です。

株主の皆様方におかれましては、当社の経営方針にご理解をいただき、引き続きご鞭撻およびご支援のほど宜しくお願い申し上げます。



## ■ 事業紹介

当社は、創薬研究に高い技術力、付加価値の高いサービスを幅広く提供することによって、創薬、病態の解明に貢献しております。

### ジェノミクス事業



好調に推移

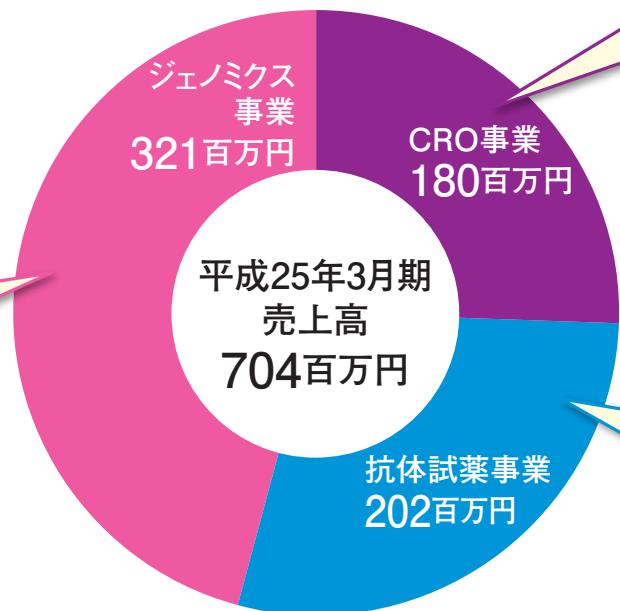
ノックアウトマウス、ノックインマウス、トランスジェニックマウスなどの遺伝子改変マウスの作製、次世代シーケンス解析などの遺伝子解析関連受託サービス、病態可視化マウスなどのモデルマウス販売を提供しています。これまでに遺伝子改変マウス1,000系統以上、ES細胞2,200系統以上の豊富な作製実績を有しています。また、遺伝子改変マウス作製技術を基盤技術とし、組織・臓器レベルでのヒト化マウスの研究開発に取り組んでいます。

#### 【主な製品・サービス】

- TG Resource Bank®
- 遺伝子破壊マウス作製受託
- 遺伝子解析 (DNAマイクロアレイ解析、次世代シーケンス解析)
- 病態モデルマウス販売



### ▼ 売上高構成



### CRO事業



好調に推移

マウス・ラットからサル・ブタまで幅広い薬効薬理試験、安全性薬理試験、薬物動態試験などの前臨床試験受託サービスを提供しています。薬効薬理試験においては、各種動物を用いて病態モデルを作製し、医薬品等の評価を実施しています。安全性薬理試験においては、サルを用いたテレメトリー法による心・血管系に関わる試験を実施しています。薬物動態試験においては、非標識体を用いた各種動物、病態モデル動物を用いたADME試験を実施しています。

#### 【主な製品・サービス】

- 薬効薬理試験
- 安全性薬理試験
- 薬物動態試験



### 抗体試薬事業



横ばいに推移

GANP® マウス技術を基盤とした高親和性・高特異性モノクローナル抗体作製、タンパク質高発現細胞作製の受託サービス、自社開発抗体製品を含む試薬製品販売を提供しています。GANP® マウス技術は、分子上の小さな違い(アミノ酸1残基)を識別する抗体、小さい分子(低分子化合物)を認識する抗体、中和抗体、ファミリー分子を個別認識する抗体を作製する技術です。GANP® マウス技術により作製した抗体を用いて、外部研究機関と共同でがんマーカーなどの診断薬の研究開発に取り組んでいます。

#### 【主な製品・サービス】

- GANP® 高親和性抗体作製
- タンパク質高発現細胞作製
- 研究用抗体製品の輸入販売
- がん免疫細胞療法研究用サイトカインの販売



## Technology テクノロジー

### 可変型遺伝子トラップ法

熊本大学生命資源研究・支援センター 教授 山村研一(当社取締役)らにより発明された、遺伝子改変マウスの効率的な作製方法であり、トラップベクターによりマウスES細胞に発現する遺伝子をランダムに完全破壊する方法です。従来のトラップ法に比べて、遺伝子の完全破壊が行えること、破壊した遺伝子の位置にヒト遺伝子や突然変異などを挿入可能であることが特徴であり、ヒト疾患モデル動物の開発や詳細な遺伝子機能解析に有用な手法です。当社は、本技術を基軸とした遺伝子破壊マウス作製技術を基幹事業としています。

### ヒト化マウス

ヒト化マウスとは、便宜的に遺伝子レベルでのヒト化マウス、細胞レベルでのヒト化マウス、組織・臓器レベルでのヒト化マウスの3種類があります。遺伝子レベルでのヒト化マウスは、トランスジェニック社が持つ可変型遺伝子トラップ法または可変型相同組換え法によりすでに作製可能です。細胞レベルでのヒト化マウスの例としては、ヒト白血球を持つマウス、ヒト抗体を産生するマウスがあげられます。当社は、熊本大学とヒト化マウスの開発に関する共同研究をすすめております。本共同研究で目指すのは、組織・臓器レベルでのヒト化マウスでマウスの生体内で正常にヒト組織や臓器を再構築し、持続的に機能をさせ、ヒトの細胞や組織が拒絶されことなく体内に存在するマウスです。例えば、ヒトの肝臓を持つマウスなどがあります。このようなヒト化マウスを用いることにより、前臨床試験(新薬の安全性テスト)や創薬研究がよりヒトの状態を反映したモデルで進めることが可能となります。

### GANP®マウス技術

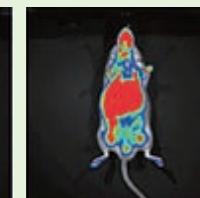
GANP (Germinal Center Associated Nuclear Protein)とは、熊本大学 阪口薫雄教授らにより発見された遺伝子で、抗体を産生するB細胞で発現しています。GANP® マウス技術とは、このGANP遺伝子を過剰に発現させたGANP® マウスを用いて抗体を作製する技術です。GANP® マウスで得られる抗体は、親和性や特異性の高いことが特徴で、診断薬や抗体医薬の開発への展開が可能です。当社は、本技術による抗体の自社製品開発、および本技術のライセンス供与を行い、抗体事業収益の柱としております。

### 病態可視化マウス(細胞ストレス可視化マウス)

病態可視化マウスは、がん、メタボリックシンドローム、動脈硬化、リウマチなど様々な疾患と関連すると考えられている「小胞体ストレス」「酸化ストレス」について、マウス生体でリアルタイムに細胞ストレス部位を簡便に可視化することを可能にしたものであり、疾患モデルマウスの病態解析や、薬理・毒性試験に有用なシステムを提供します。



小胞体ストレスなし



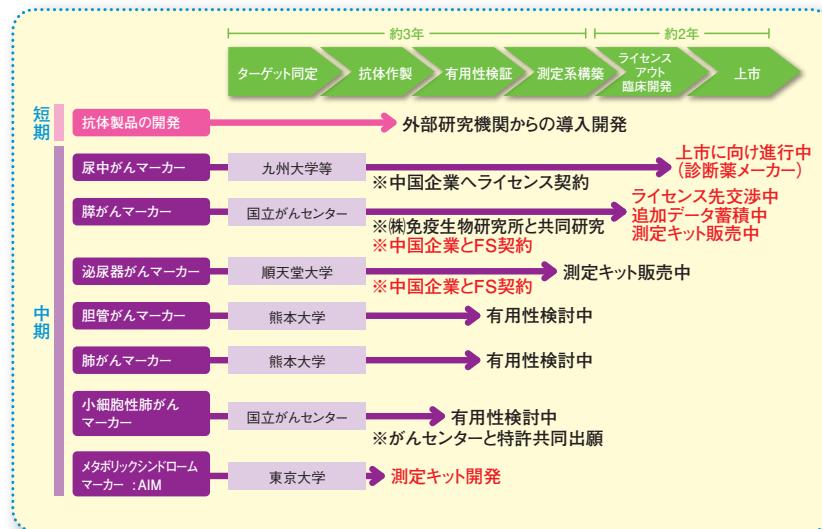
小胞体ストレスあり

## ■ 研究開発基本方針

研究開発テーマについては、収益基盤の早期確立を目指すため、選択と集中を基本に絞り込みを行って参りました。今後は選択と集中を進める中で、ジェノミクス事業における熊本大学、群馬大学等との有用なモデルマウス共同研究開発および導入、さらに抗体事業におけるシーズ探索の拡充の一環として東京大学等、有力研究機関との共同研究を通じて、将来的な収益化につながるプロジェクトに経営資源を投入します。

## ■ 研究開発パイプラインの進捗状況

当社は、GANP<sup>®</sup> マウス技術を用いて作製した抗体を様々なバイオマーカーとして診断薬へ展開するよう研究開発を進めております。バイオマーカー開発パイプラインの充実を図ることで、抗体事業のブランド力を高めて参ります。



## ■ 研究開発トピックス

2012年 5月	日本実験動物科学・技術 九州2012にてランチョンセミナーを開催 細胞ストレス可視化マウスに関する独占ライセンス契約締結のお知らせ	7月	新実験施設の起工式実施について 日本安全性薬理研究会 第2回技術交流会「ラボワーク技術交流会」が当社新実験棟で開催 タンパク質高発現細胞作製技術の研究結果がPLOS ONEに掲載
6月	抗 DYKDDDDKモノクローナル抗体の研究結果がAnalytical Biochemistryに掲載 抗AIM モノクローナル抗体の発売について	9月	「GANP <sup>®</sup> マウス技術」に関する特許が日本にて成立
		11月	細胞ストレス可視化レポーター プラスミドの発売

※2011年より知的財産報告書は、事業報告書に統合いたしました。

## ■ 知的財産戦略の方針

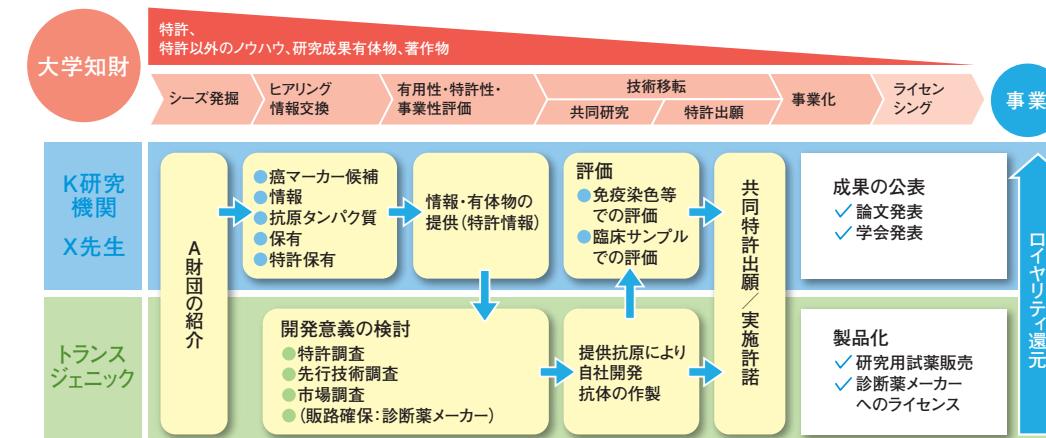
当社は、創薬ターゲットを探索している製薬企業や疾病の解明に取り組む研究者へ、有益な研究ツール、技術情報、知的財産を提供することにより、創薬、病態も解明に貢献したいと考えております。

また、当社は、大学・研究機関等との共同研究を積極的に行い、当社事業とシナジー効果が発揮でき得る技術を、研究開発の早期段階において導入することに努めております。研究開発の早期段階での技術導入により、その技術が公開される前に確実な知的財産権を確保するとともに、豊富な実験データに裏付けられた強い特許、将来のマーケティングを見据えた特許網

を構築すべく、研究開発、事業戦略と融合させた特許戦略を展開しております。さらに、導入した技術を付加価値の高い技術や知的財産に育て、これらの技術から生まれた独自性の強い製品・サービスを提供するとともに、知的財産、技術情報のライセンスビジネスを展開しております。知的財産のライセンスについては、製薬企業、診断薬メーカーなどの開発・事業のステージにあわせたマイルストーンを設定することにより、複数の事業ドメインを対象としたハブアンドスポークモデル型のライセンス契約とするなど、戦略的な知的財産の活用にも努めております。

## ■ 特許・ライセンスの事業への貢献

当社特許の事業への貢献度は高く、当社は保有特許の極めて高い実施率を保持しております。また、積極的なライセンスイン、ライセンスアウトを通じて、直接的な収入の増加のみならず、事業の優位性を図り、将来を見据えた中長期的な知的財産戦略を実行しております。



### ■ 事業戦略、研究開発戦略、知的財産戦略の横断的な取り組み

当社は、ジェノミクス、CRO、抗体試薬の各事業部制組織と経営企画室を設けております。

ジェノミクス事業部は、マウス作製受託を中心に、CRO事業部は前臨床試験受託、また抗体試薬事業部は抗体作製受託とともに、新規腫瘍マーカーの開発や抗体製品販売を担っております。

経営企画室は、経営戦略に関わる事項および知的財産およびライセンスの管理を担っており、知的財産戦略の策定・実行から自社で創出された技術の権利化や活用、さらに他社の技術動向の調査や侵害の有無、技術提携や知的財産の戦略的な導

入等、知的財産に関する業務全般も担っております。また、社内での知的財産教育にも努めており、社内各部署への自社・他社の知的財産関連情報の発信、戦略的な知的財産の取得を目指した研究開発の指針などの提起を行っています。

当社のようなベンチャー企業にとっては、国内外の大学などの学術機関や製薬企業などとの連携が極めて重要となります。当社は、知的戦略部門を中心に、大学の知財部等から積極的に技術導入やライセンスを受けると同時に、製薬企業や委託企業などとの業務提携や技術提供を行い、当社事業の拡大・強化に努めています。

### ■ リスク対応情報

2013年3月末時点において、当社に対する特許訴訟やクレームはありません。当社は、自社知的財産の管理・運営のみならず、他社知的財産の調査・監視を徹底しております。新たな研究開発を開始する前には、特許事務所等へ特許調査を依頼し、自社技術が他社の特許侵害に当たらぬよう、リスクマネジメントに努めております。

### ■ 主な特許成立マップ

トランスジェニック社の特許群は、トラップ技術関連、GANP<sup>®</sup> マウス技術関連、腫瘍マーカーなど、事業の根幹となっております。これらの知的財産をもとに、国内外の複数の企業とライセンス契約を積極的に進めてまいります。

- トラップ法関連特許 日本、米国、欧州、豪州、中国、香港
- 尿中がんマーカー関連特許 日本、米国
- 膜がんマーカー特許 日本
- GANP<sup>®</sup> タンパク質特許 日本、米国、カナダ
- GANP<sup>®</sup> マウス関連特許 日本、米国、欧州、豪州、中国、韓国、香港



### 連結貸借対照表

(単位:千円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
<b>(資産の部)</b>		
流動資産	1,663,867	1,613,850
固定資産	838,514	1,332,718
<b>資産合計</b>	<b>2,502,381</b>	<b>2,946,568</b>
<b>(負債の部)</b>		
流動負債	184,321	160,895
固定負債	20,739	462,440
<b>負債合計</b>	<b>205,060</b>	<b>623,335</b>
<b>(純資産の部)</b>		
株主資本	2,280,874	2,310,108
資本金	5,404,263	5,405,356
資本剰余金	546,743	547,836
利益剰余金	△3,668,350	△3,641,302
自己株式	△1,782	△1,782
その他の包括利益累計額	3,601	△40
新株予約権	8,312	7,562
少数株主持分	4,533	5,602
<b>純資産合計</b>	<b>2,297,321</b>	<b>2,323,232</b>
<b>負債純資産合計</b>	<b>2,502,381</b>	<b>2,946,568</b>

### 連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:千円)

	前連結会計年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自平成24年4月1日 至平成25年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	△200,553	△62,003
投資活動によるキャッシュ・フロー	△394,103	△52,239
財務活動によるキャッシュ・フロー	68	1,436
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△594,589	△69,274
現金及び現金同等物の期首残高	1,993,125	1,398,536
現金及び現金同等物の期末残高	1,398,536	1,329,262

### 連結損益計算書及び連結包括利益計算書 (連結損益計算書)

(単位:千円)

	前連結会計年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自平成24年4月1日 至平成25年3月31日)
売上高	607,985	704,067
売上原価	380,063	430,584
<b>売上総利益</b>	<b>227,922</b>	<b>273,482</b>
販売費及び一般管理費	355,573	309,893
営業損失(△)	△127,650	△36,411
営業外収益	8,159	6,003
営業外費用	898	1,329
経常損失(△)	△120,390	△31,737
特別利益	—	83,627
特別損失	29,900	19,634
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	△150,290	32,255
法人税、住民税及び事業税	5,997	8,145
法人税等調整額	△682	△4,007
少数株主損益調整前当期純利益又は少数株主損益調整前当期純損失(△)	△155,605	28,116
少数株主利益	642	1,068
当期純利益又は当期純損失(△)	△156,248	27,048

### (連結包括利益計算書)

(単位:千円)

	前連結会計年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自平成24年4月1日 至平成25年3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益又は少数株主損益調整前当期純損失(△)	△155,605	28,116
その他の包括利益	2,160	△3,641
<b>包括利益</b>	<b>△153,445</b>	<b>24,474</b>
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△154,088	23,406
少数株主に係る包括利益	642	1,068

## 会社概要

2013年3月31日現在

会社名	株式会社トランスジェニック
設立	1998年4月
資本金	5,404百万円
従業員数	32名
事業所	
本社	熊本県熊本市中央区九品寺二丁目1番24号
神戸研究所	兵庫県神戸市中央区港島南町七丁目1番地14
東京オフィス	東京都千代田区霞が関三丁目7番1号

## 役員

2013年3月31日現在

代表取締役社長	福永 健司	常勤監査役	鳥巢 宣明
取締役	山村 研一	監査役	遠藤 了
取締役	坂本 珠美	監査役	佐藤 貴夫
取締役	船橋 泰		
取締役	清藤 勉		

## 株主メモ

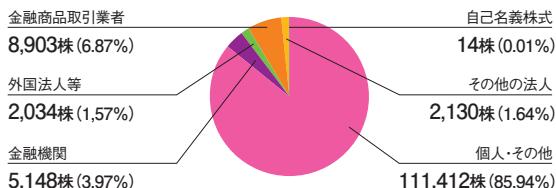
## 株式の状況

2013年3月31日現在

発行可能株式総数	436,301株
発行済株式の総数	129,641株
株主数	12,447名

### 大株主の状況

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
大阪証券金融株式会社	3,750	2.89
野村證券株式会社 野村ネット&コール	3,221	2.48
坂本 佐兵衛	1,960	1.51
松井証券株式会社	1,895	1.46
マネックス証券株式会社	1,426	1.09
日本生命保険相互会社	1,350	1.04
上永 智臣	1,051	0.81
BARCLAYS CAPITAL SECURITIES LIMITED	1,032	0.79
楽天証券株式会社	913	0.70
三松 成子	864	0.66



証券コード 2342

上場市場 東京証券取引所 マザーズ

上場年月日 2002年12月10日

事業年度 毎年4月1日から翌年3月31日まで

定時株主総会 毎年6月

基準日 定時株主総会・期末配当 毎年3月31日

中間配当 毎年9月30日

株主名簿管理人 三菱UFJ信託銀行株式会社

特別口座の口座管理機関

同連絡先 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部  
〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号  
TEL:0120-232-711 (通話料無料)

公告方法 電子公告(当社ホームページに掲載)

※事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。

## IRからのお知らせ

最新ピックスやホームページの更新情報などを電子メールでお知らせしています。

ご登録は当社ホームページにて受け付けています。

<http://www.transgenic.co.jp/>



当社のIR活動についてご意見・ご感想をお聴かせください。  
下記アドレスへのご連絡をお待ちしております。

[ir@transgenic.co.jp](mailto:ir@transgenic.co.jp)